令和5年度　学校関係者評価書（様式）

鈴鹿市立神戸小学校

NO.

評価項目	本年度の活動（具体的な手立て）と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	①教員の授業力向上 ・「主体的に学びに向かう子の育成」の視点に立った授業改善 ・5教科（国・社・算・理・生単）のグループをつくり，各教科から「主体的・対話的で深い学び」の授業づくりの研修を推進 ・全教科グループが授業公開 ・授業公開後，検討会，指導方法の研究を実施 →学校アンケートによる検証 ②家庭学習の充実 ・家庭学習の充実 ・家庭学習のてびきを配布し，啓発 ・毎学期，家庭学習強化週間を設定 →保護者のコメントの検証 ③基礎学力の向上 ・習熟度別，TTによる授業，学習サポーターの活用を推進 ・補充学習「ぐんぐんタイム」の実施 ・読む・書くワークシートの取り組み →定期テスト等で個人の変化を把握 →学校アンケートによる検証 ④読書活動の充実 ・学校図書館の環境整備 ・図書委員によるイベント ・図書のたより発行 ・巡回司書の活用 →学校アンケートによる検証 →貸し出し冊数の検証 （成果と課題） ①教員の授業力向上 ・5教科における主体的に学びに向かう子ども像やそれにせまるための授業における手立てを考え、それをもとに授業実践を進めることができた。 ・5教科それぞれ授業公開を行い、その後、参観者全員が出席する事後研修会を開き、授業力を高めるための意見交流を行った。 ・「児童アンケート」における「授業において自分の考えを発表することは楽しい」と回答する児童が減少した。目の前の児童の実態に即した課題の授業であったか等、授業改善に努める必要がある。 ②家庭学習の充実 ・家庭に家庭学習の取り組みへの啓発等を行っているが、各家庭による差が大きい。家庭学習の充実には、学校と保護者の連携が必要不可欠であるため、今後も連携を意識して取り組んでいく。 ・家庭学習強化週間では、学習時間、メディアコントロール、読書時間などの目標を児童自ら設定させ、意識をもって取り組ませるとともに、保護者、教師のコメント欄を設け児童見守り、声掛けに努めた。その結果、児童アンケートにおいて8割以上の児童が自ら進んで家庭学習に取り組んでいると回答している。 ③基礎学力の向上 ・保護者によるアンケートでは、約97％程度の方から基礎学力をつけていると回答していただくことができた。 ・「児童アンケート」における「授業で学習したことは，よく理解できる」に対する回答が75％の児童が理解できると回答した。学年が上がるにつれて、肯定的な回答が減少している。個に応じた指導・支援を充実させるため，指導・支援内容の見直し、TTの有効な活用方法を検討していく必要がある。 ④読書活動の充実 ・保護者によるアンケートでは,読書の習慣化ができているが49.5%であった。家庭への読書をする良さの啓発や協力が必要であると感じた。　・児童アンケートでは,低学年はふだんから本を読んでいると答えた児童が76.4%であったが,高学年になると47.2%と著しく減少していることが分かった。高学年には特に,授業の隙間時間や朝の会後の読書タイムなど意図的に読書をする時間を作るなど習慣化できる取組を考えたい。・今年は図書委員によるイベントを年2回行うことができた。夏には巡回司書さん・図書ボランティアさん・教員で連携し書架を大幅に変更した。読みやすい配置や本を手に取りやすい環境を整えることができた。	① 全教科グループが「主体的に学びに向かう子」を目指して授業を公開し、意見交流するなど授業力向上に努めている。 授業公開後の教員間での意見交換、交流は授業力向上だけでなく、リスクマネジメント的にも良い取り組みだと思います。 児童アンケートの分析については、もう少し詳細が知りたいところです。 なお、三重大学の教育学部の先生がデータ分析による学習効果の分析や支援を行っています。電子データで取得できているのであれば、そのような外部リソースの活用の検討も必要だと思いました。 ② 家庭と連携が必要な内容こそ、PTAとの連携を検討すべきであると思いますが、その点については記載がありませんでした。 ③ 基礎学力の向上に向けていろいろな取り組みをしている。 教員が子どもに向き合う時間を確保することが子どもの学ぶ権利を守り、基礎学力の向上につながるのではないか。 ④ 図書ボランティアの観点から、毎年、新刊本を入れてもらっているが、古い本の修理が大変である。子どもたちが読みたいと思えるよう整備も進めるが、学校の指導も大切にしたい。 各家庭から集めるなどして、図書室の整備のみでなく、学級文庫についても整備していきたい。	① 今後も、児童が主体的に学びに向かうことのできる授業づくりに努め、教員の授業力向上を目指す必要がある。 ② 今後も、引き続き学校と保護者の連携が必要不可欠になると考える。そのため、通信や懇談会などで取り組みを共有していく。 ③ 目の前の児童の実態に適した指導を職員全体で考え、実践していくことが必要である。また、児童の実態を正しく判断するためにも、児童とじっくり向き合う時間の確保に努めたい。 ④ 学級指導等で本の扱い方ついて指導を徹底する必要がある、また、学級文庫充実のため、各家庭で不要になった本を寄付していただくなどの手立てを検討していく。
ＩＣＴの活用	①教師のICT活用指導力の向上 ・ICT支援員による研修の実施 ・実践を共有する。 ②児童のICT活用能力の向上 ・家庭学習にICTを取り入れる。 ・ICT支援員によるTT授業の実施 ・発達段階に応じたICT活用能力の内容を年度初めに定め、その表を基に児童に身に着けさせていく。 →アンケートによる検証 （成果と課題） ①教師のICT活用指導力の向上 ・フォームやクラスルームなど、基本的なことから始め、その応用「Padlet」などのツールの使い方についての研修を行った。 ・研修に参加できなかった職員に向けて毎月職員用の通信を発行した。通信にはICTを活用した授業も載せ、共有も行い、教員自身が様々な活用法を学ぶことができた。 ・教員の中にはまだパソコンが苦手な方もいるので、情報活用能力の二極化にならないよう今後努めていきたい。 ②児童のICT活用能力の向上 ・長期休みや普段の家庭学習にchromebookを用いた学習を取り入れた。 ・4月にそれぞれの学年の到達目標を設定しそれに沿って情報活用力を身に着けさせた。 ・高学年では持って帰ることが日常化したとともに、自主学習の際はインターネットを取り入れるといった調べ学習の幅を広めることができた。 ・ICT支援によるTT授業では、chromebookを用いた意見の交流やスライドを用いた共同制作を授業に取り入れるきっかけにすることができた。 ・児童にとって端末が身近に感じられるようになるとともに、ネットトラブルが心配されるのでネットモラルの授業を手厚くしていきたい。	① 情報活用能力の二極化と記載があるように、可能な範囲で児童に取って担当教員で取り組みに差が出ないような工夫が必要だと思います。また一方で、教員の負担が増えるので、外部リソースの活用の検討も必要だと思いました。 ② 情報リテラシー教育の内容について保護者も知る必要があると思いました。 ICTを使った授業を参観できなかったので、実感としてよくわからない。 タブレットの扱いに雑さを感じることがある。大切に扱ってほしい。	① ・教員の情報活用能力によってクラスに差が出ないよう、学年ごとにICT担当を配置する。それぞれの学年に設けている到達目標を必ず到達できるようにするとともに、他学年で日常的に活用内容を共有できるようにしていく。（到達はできている。） ・教員向けの研修を行ってきたが、活用に向けて研修内容の中に実践も入れるようにしていく。 ② ・低学年は中学年、高学年で使うツールの基礎を身につける。 ・中学年のうちにタイピングの能力を身につけさせる。 ・一つの課題を設定し、グループで解決を目指していくなど端末を活用して課題解決を行う活動を授業で設定していく。（プレゼンの資料作りなど） 情報セキュリティ・情報リテラシーについて ・児童に情報セキュリティ、情報リテラシー教育を行っていくうえで、講師の招へい等のみでなく、研修などを通して職員にも指導できる力をつける必要がある。 端末の扱いについて雑さが目立つときがある。不注意による破損の報告もあるので、丁寧に扱うようにさらに意識付けしていく必要がある。
	①児童への対応 ・必要に応じて、SLSにも家庭訪問をしてもらい、登校の手助けをする。 ・不登校担当はいつでも相談の窓口となり、必要なら担任と家庭訪問をする。 ・必要に応じて、対応児童の時間割編成や個別対応の配置について支援会議を持つ。 ②職員間の情報共有 ・不登校の兆候が見られる児童について、担任に家庭訪問シートや児童・生徒理解支援シートを記入してもらいながら情報共有を図る。 ・児童・保護者の意向を尊重しながら、必要に応じて不登校対策委員会を開き、今後の対策を考え、保護者に伝える。長期化するようなら、保護者を呼び、支援会議を開き今後の対応を練る。 ・毎月欠席した児童の日数を確認して、新たな長欠が出ないよう声掛けをする。		① ・必要に応じて迅速な支援会議の開催や保護者の思いを確認する。また、不登校の傾向がある児童の保護者には、SLSの存在など、情報を早く伝え、早期対応を心掛ける。 ② ・家庭訪問シートは、その都度シートに記入して関係者で回覧・共有をはかるが、児童生徒理解・支援シートは、共有ホルダーにデータとして、その都度担任が記入し、残していく。 ・児童生徒理解・支援シートは、必要に応じて生活指導委員会や職員会議において、全職員で情報共有できるようにする。

長欠減少	（成果と課題） ①児童への対応 ・児童の様子によっては、担任と担当で保護者と面談をしたり、不登校対策委員会を開いて今後の対策を考え、保護者に伝えたりした。 ・必要と思われる場合、保護者に来校してもらって支援会議を開き、保護者・児童の思いを大切にしながら、今後の対策を話し合った。 ・教室になかなか入れない児童に対し、SLSには母親と児童に話をしてもらいながら教室に入れるように付き添ってもらったり、不登校気味の児童の家庭訪問をしてもらい、登校の手助けをしてもらったりした。 ・保護者の知りたい情報がすべて伝わるようにしなければならないが、SLSの情報など、伝わり切れていないところがあった。 ②職員間の情報共有 ・欠席日数が多い児童を把握し、担任と情報を共有しながら、全体にも生活指導部会、職員会議と主な情報共有ができた。 ・家庭訪問をしたときは必ず家庭訪問シートに情報を記入してもらい、不登校対策委員会のメンバーで情報共有をすることで、今家庭でどのような状況なのかがよくわかった。児童生徒理解・支援シートはデータとして残したほうがよかった。ただし、担任がその都度必要事項を打ち込む必要がある。 ・長期不登校や不登校になる危険がありそうな児童については、児童生徒理解・支援シートに必要事項を記入してもらい、情報共有をすることができた。 ・常に不登校児童（欠席日数が多い児童も含めて）の担任とは情報共有をしてきたが、どうしても不登校の予防のほうに時間をかけることとなった。 ・保護者・児童の様子を考え不登校対策委員会を開いたつもりだが、もう少し不登校対策委員会の数を増やせた。	① 時間もかかるし、大変だと思うが、対象の児童、保護者は信頼していると思います。 SLSの存在は多忙な担任と子どものつなぎ役としてありがたい。さらに日数、時間を増やしてほしい。 多様な児童への対応は必要である一方、教員の時間にも限りがある。よって、情報共有などにおいて、ICTなどの導入など効率化の検討が必要である。 ② 教員間の情報共有による対応に加え、他の学校の好事例などを共有し、対応の改善に繋げられる事もあると思いました。	・情報共有をする中で、必要に応じて、できるだけ早く不登校対策委員会や支援会議をもてるようにする。
地域連携	①学校ボランティア活動の活性化 ・ボランティア担当、地域コーディネーターが窓口となり、地域学習や出前講座などに学校ボランティアを活用する。 ・学校、家庭、地域と連携した見守りで、児童の交通事故ゼロを目指す。 ②学校ホームページ，学校だよりの地域配布による情報提供の充実を図る ・学校自己評価の提供と学校関係者評価の実施 ・満足度調査（児童，保護者）の結果提供 （成果と課題） ①学校ボランティア活について ・コロナ禍では学校へ出入りするボランティアも制限されていたが、今年度は家庭科（調理実習・ミシンなど）、図工（電動のこぎり・彫刻刀など）などの学習活動でボランティアを活用することができた。 ・図書ボランティアの増員により、掲示物や図書館整備により、図書環境の充実を図ることができた。 ・安全ボランティアについて、人員の把握、一括した連絡手段などにおいて改善の余地がある。 ②情報提供の充実について ・学校ホームページの閲覧率（今年度：約31％）の向上手段として、保護者配布・地域回覧の学校だよりへHPアドレスを記載していく。 ・各種ボランティアへ宛てた卒業する6年生からの「感謝の手紙」を回覧掲載とし、地域の方々の目に触れる形に変更をした。 ・学校運営協議会で議題に上がる事項について、学校運営や実態の理解を深めていただくために授業参観や活動体験など身近に触れることのできる協議会運営を行っていきたい。	① 登録人数も少ない中、協力していただけるボランティアには感謝。子どもたち、先生方にもボランティアの認知度を上げるような対策を考えたい。 学校ボランティアは活用されているが、学習面にもっと活用できると良い。 安全ボランティアとの連絡・連携をもっと密にする方法はないものか。 PTAの活動の見直しが注目されている中、ボランティア活動の必要性を含め、学校と保護者で情報共有そして意見交換を行う必要があると思いました。 ② 学校ホームページの情報発信が少ない。キッズウィークや創立記念日もわからない。もっと工夫と活用をお願いしたい。 HPの活用も一つの手段であるが、地域の自治会やまちづくり協議会など、学校を支援していただいている団体、組織があるので、新型コロナの影響が落ち着いた今日の状況で、連携の再構築が必要だと思いました。	① 既存のボランティア活用はもちろんであるが、学力向上、長期欠席児童の縮小などの面から、新たなボランティアの募集と活用を図る。 ② ・学校だよりの地域配布に合わせ、学校HPのQRコード掲載 ・HPと年間行事計画の定期的な更新 ・学校運営協議会委員の皆さんを中心に、地域にの方々にも学校についてより良く知っていただくため学校訪問、参観の機会を大切にする。 ※地域連携の再構築のため、まちづくり協議会など各地域の組織とのつながりを持てる行事、活動の開催を目指す。
特別支援教育	①個別の支援計画・指導計画に基づいた支援の推進 ・特別な支援が必要な児童について，「すずかっ子ファイル」を学期ごとに作成し，学年末には評価・考察を行う。（作成率100％） ・家庭訪問や個別懇談を行い，保護者と連携した支援を推進する。 ・支援ファイル保持者について，必要に応じて毎月ごとに経過・変容を記録を書き留めていく。 ②組織的な取組の推進 ・特別支援コーディネーターを４人設置，それぞれの役割を明確にする。 ・推進委員を各学年から1名選出，校内推進委員会を各学期に2回開催。 ・支援会議を随時開催し，学年，すくすくルーム，保健室，特別支援学級等での迅速な対応を促進する。 ・不登校傾向にある児童の支援に対応するコーディネーターが生指部で発信。スクールライフサポーター，スクールカウンセラーを活用する。 ③教職員研修の推進 ・特別支援教育に係る校内研修を実施する。（年１回以上） ・すくすくルーム，特別支援学級の授業参観を行う。（年1回以上） （成果と課題） ①個別の支援計画・指導計画に基づいた支援の推進 ・「すずかっ子ファイル」から「すずっこファイル」への移行も進めながら作成した。児童の困り感やニーズを把握し、適切な支援ができるように校内研修会も開催し、個別の計画を立てることに役立てることもできた。 ・必要に応じて校内関係者での情報共有や支援会議、保護者を交えての支援会議を行い支援を推進した。 ②組織的な取組の推進 ・４人のコーディネーターで役割分担できた面もあるが情報共有するには定期的な会議の場が必要であった。 ・支援の内容に合わせて学年、すくすくルーム、保健室、スクールカウンセラーのどことつないだらいいかを検討し支援したが、学級担任や教科担当をしていると実際の支援にあたることが難しかった。 ③教職員研修の推進 ・すずっこファイルの書き方についての校内研修会を2回、学級指導の校内研修会を1回行った。職員による通級指導教室（すくすルーム）、特別支援学級の授業参観の機会も設けて見学できた。	① 校内推進委員会の開催、支援会議組織的に推進している様子がうかがえる。 ② 特別支援学級に関わっている子どもたちはとても楽しそうな様子が伺える。活動準備や運営がしっかりしている様子がわかる。 ③ 課題解決のために、他の学校など、学内の好事例について学ぶ機会などがあるのか気になりました。またのそのような情報については、家庭との共有も必要だと思いました。	① ・今後も定期的な情報共有だけでなく、常に支援が必要な場合は関係の職員で会議を開き、情報法共有や支援方法について話し合い、支援を続けていく。 ・保護者との連携も必要となることも多いので、保護者とのつながりも大切にしながら、多くの目で統一した支援をしていく。 ・通級指導教室に通級している児童は、通級でできることが教室でも般化されていくように、学級と通級指導教室の連携も行っていく必要がある。 ② 引き続き、個々の特性に応じた最近接領域を見極め、児童の持てる力を発揮できる環境を整えていく必要がある。 ③ 要支援児童が増加傾向にある中で、それぞれの学級での初期対応が重要となる。そのための初期支援方法、児童理解教育などについて、すべての職員が研修等を通して学ぶ場を持つ。